

変容する移動労働経験 — タイ北部バヤオ県ドークカムタイ郡の移動労働者の生活史から —

Changing Experiences of Migration:
From Oral Life History of Thai Migrant Workers in Northern Thailand

松井 智子*
MATSUI Tomoko

Castles and Miller indicated in their book: *The Age of Migration* (1993), that international migrants have 4 stages in the process of migration, which suppose migrants take steps from temporary migrants to settlers in destination countries.

Behind their analysis of migration patterns, there is a certain premise that migrants see themselves as settlers-to-be somewhere in one place.

However, do migrants in developing countries still regard their migration behavior as a step before a settlement? My research, focusing on migrants' oral life histories to capture migration experiences from their perspective, leads me to believe that there generates a new perspective or paradigm on migration, that is, they now believe they can live not in one "home" community or country but anywhere in the world within the mobile lifestyle, feeling their migration experiences as their active and positive choice of their own. It can be said that this is a quite different perspective of seeing their experiences as "sacrifice" for their far-away "home" community.

My research also shows that migrant workers tend to repeat work abroad, expanding a sphere of move and their period of stay being flexible. They continue or resume sending remittance even during a long absence in their home community. There are various opportunities for migration in the community based on divers human networks. But behind these facts or patterns, the accumulation of divers migration experiences is generating a remarkable change in migrants' view on their migration experiences.

1 はじめに

本稿の目的は、タイ北部農村出身の国内外への移動労働者31名に対するライヒストリーの聞き取り調査から、その移動労働の実態を把握しつつ、同時に移動労働者自身が自らの移動経験をどのよ

うに捉え、意味づけているかを明らかにしようとするものである。まず、近年の移民研究の展開と課題を踏まえ、次に、31名のインフォーマントのライヒストリーを素材に、1) 移動圏、2) 滞在期間、3) 送金、4) 移動契機、5) 移動の動機、6) 移動労働観という6つの観点から検討することによって、従来の「出稼ぎ」や「口減らし」とは異なるタイプの移動労働経験が見受けられた

* 東京大学大学院総合文化研究科

ことを指摘する。最後に、新たなタイプの移動経験について本稿から得られる示唆と課題をまとめたい。

(1) 近年の移民研究の展開

従来の移民研究では、移民はいくつかの段階を経て、受け入れ国に定住化するものと想定されてきた。カースルズとミラーは、移民過程の4段階モデルを提示している [Castles & Miller 1993: 26-27]。第1段階は、主として若年労働者による一時的な労働移民で、海外送金と母国への帰国志向が強い出稼ぎの段階である。第2段階は、滞在期間が長期化し、血縁や互助関係等に基づいた移民の社会的ネットワークが発展する段階。第3段階は、家族呼び寄せの開始と、エスニック・コミュニティの形成、長期定住意識の高まりによって特徴づけられる。そして第4段階は永住の段階であり、受け入れ国の対応によって、市民権を獲得するか、マイノリティとして周辺化されるかのいずれかの道に分かれるという。

しかし、1970年代以降の国際移動のグローバルな展開はこうした「一時的な労働移動から定住へ」という単線的な図式では捉えきれないということが、近年の移民研究でしばしば指摘されている。森幸一は、1985年頃から日本に急増したブラジルからの日系人《デカセギ》について、もはや一時的出稼ぎとは捉えられないが、永住を主体的戦略としてとっているとも考えられないし、その中間的な移住形態を「還流型移住 (cycle migrant)」あるいは「トランスマイグラント (trans-migrant)」として積極的に位置づけている [森 2000:347]。その特徴は、「つねに最終的帰国プロジェクトを保持しながら、自国と移住先国との往復を繰り返し、その結果として二国にまたがるトランスマジナルな社会的世界を構築するような『人生』のあり方、生き方」 [ibid.:347-348] であるという。具体的にいえば、彼らは送金を継続し、電話や一

時帰国により自国の社会的世界との結びつきを維持し、「不在」のまま自国での不動産購入などを通じて社会的経済的上昇の達成を試みる。と同時に、彼らは移住先国で就労し、その社会的世界を変容させつつ長期にわたり生活をしているのである。彼らにとって移動・移住は、「成功するまでは帰国しない」というような悲壯な覚悟をもって行われるものではなく、「ライフコースの一段階において、個人により主体的に選択された生活様式（あるいは生存戦略）の一つという意味合いをもっている」 [ibid.:348] と森は指摘する。さらにこうした新たな移住形態とその意味づけに加え、それに適合的な形で《ニッケイ》というトランスマジナルなアイデンティティが立ち上がっていることも示唆している。

同様な視点は、小井土彰宏によるメキシコからアメリカ合衆国への移民にかんする研究のなかでもみられる [小井土 1997]。小井土は主に送り出し社会に着目し、移民の量的な増大とその質的な転換を指摘する。すなわち、送り出し社会における移民の常態化・構造化は、階層や性別、年齢、学歴などにおける移民の多様化をもたらしているという。こうした現象の基底には、受け入れ社会と送り出し社会の双方の変容を巻き込んだトランスマジナルな「移民システム」 (migration system) の形成がある。これは家族の生存戦略や同郷者たちの相互扶助、遠隔地間の共同性といった構成要素からなる広範で緊密な国境を越えた社会的ネットワークである。その上に乗る移民個人は、必ずしも一方的に受け入れ社会に定着していくのではなく、かなり長期間の後帰国したり (long-term temporal migration)、往復を繰り返す (recurrent migration, repeater) といった様々な戦略的な選択肢を広げているという [ibid.: 51]。いまや移民のもつ行動の時空間的な準拠枠組みそのものが変容し、移動・移住に対する移民の意味づけにも変化がみられると小井土は論じる。

さらに伊藤るりは、1980年代以降の日本への外国人労働者の流入をグローバル化を背景とした移動・移住（「グローバル・マイグレーション」（Global migration））の文脈で捉え直すという作業のなかで、フィリピンにおける移動・移住に関する意識の変化を示唆している〔伊藤 1997〕。それは海外出稼ぎを人生の選択肢の一つとして捉え、積極的に肯定するような「海外就労の文化」[ibid.:255-256]であるという。また、移民が想定する移動圏が二国間に限定されず、複数の選択肢の中の一つとして相対視されているとし、ここでも移動や移住の準拠枠組みの変容が示唆されている。

(2) 「出稼ぎ労働者／移住者」という枠組みの問題性

こうした移民研究の展開に共通しているのは、ひとつには移民を捉える際の「出稼ぎ労働者（一時的な移動労働者）／移住者（永住移民）」といった二分法の相対化である。こうした二分法の背後には、「定住」という「常識」、すなわち「ひとつの場所を生活の拠点とする」という前提が含まれていると考えられよう。この枠組みによれば、移動労働者は、①自国へ送金し帰村することを前提とした「出稼ぎ労働者」か、②送金せず離村することを前提とした「移住者」かのいずれかに分けられることになる。その他に、いわゆる「口減らし」の移動者を想定することができるが、送金規範が弱く帰村することを留められているこうした人々は都市居住者（移住者）化すると考えられ、後者に含まれることになるだろう¹⁾。

しかし、前述したとおり、近年の移民研究においてはこの枠組みの問題性が指摘されており、「出稼ぎ労働者」でも「移住者」でもない新たなタイプの移動者の登場が示唆されつつある。そこで本稿では、タイに注目し、こうした文脈から今日のタイ農村における移動労働者の性格を明らか

にしようと試みるものである²⁾。

今日の移民研究においてもうひとつの課題となっているのは、グローバル化を背景とした現代の国際移動が、客観的構造の変化のみならず、移動する主体の変容をも巻き込んだものであるため、その両者をいかに接合しうるかという問題であろう。このことはもちろん、客観的条件が人の移動に対して圧倒的な制約として存在することを否定するものではない。しかし、移動先や滞在期間、送金といった客観的な側面のみならず、動機や移動労働觀などの主観的な側面を捉えることは、移動労働者をめぐる二分法的な枠組みを相対化して新たなタイプの移動者を捉えようとする際に、一定の示唆をもたらすように思われる³⁾。本稿は、ライフヒストリーの聞き取りという方法により、その両側面から移動労働者の姿を描き出そうとする試みである。

2. 変容する移動労働経験——「口減らし」・「出稼ぎ」からこぼれ落ちるもの

(1) 調査の概要

タイ北部に位置するパヤオ県ドークカムタイ郡（Amphoe Dok Kham Tai, Changwat Phayao）のある行政村にて行われた。当該地は、米作・トウモロコシ・大豆・果物などの栽培が行われている農村地域であるが、同時に、バンコクや日本で性風俗産業に従事する女性移動労働者を早くから送り出している地域として有名である⁴⁾。移動労働者の移動先は、バンコクを含む国内諸都市に加え、日本・台湾・韓国・シンガポール・サウジアラビア・イラクなど、海外への移動労働も盛んに行われている。

主たる現地調査は、2000年2月及び8月に行われた。調査対象者は、国内外への移動労働の経験をもつ帰郷者31名である。彼らの移動労働経験を中心としたライフヒストリーの聞き取り調査を行った⁵⁾。主な聞き取り項目としては、①生い立ち、

変容する移動労働経験

図-1 最終学歴

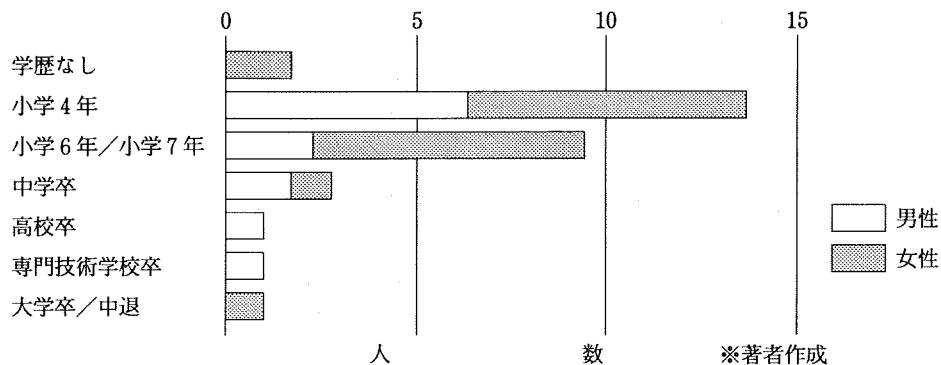


図-2 初めて移動した年齢

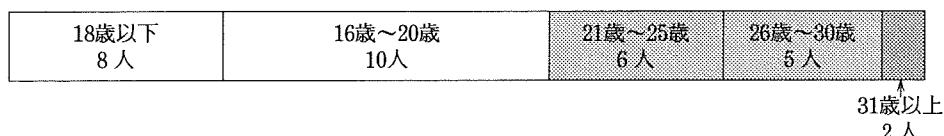


図-3 移動の回数（総移動回数：73回）

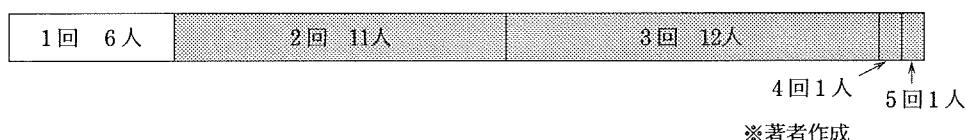


図-4 移動先

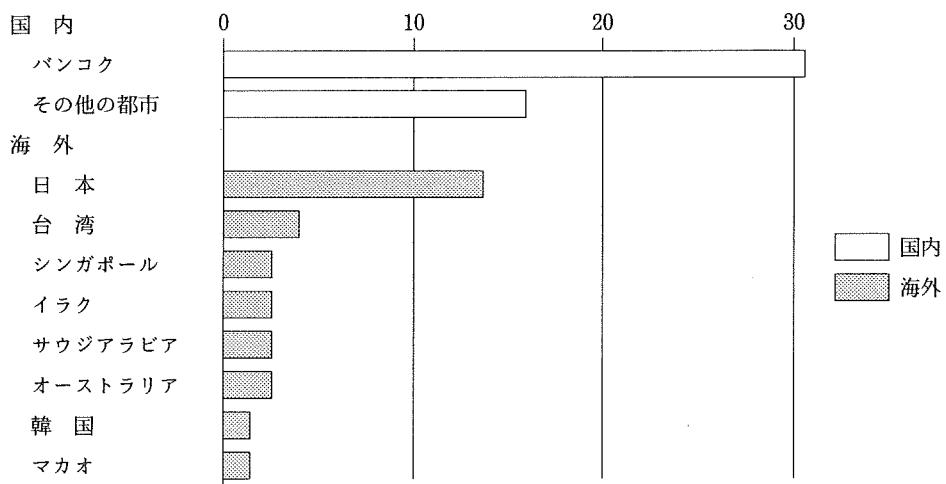


図-5 移動先での職業

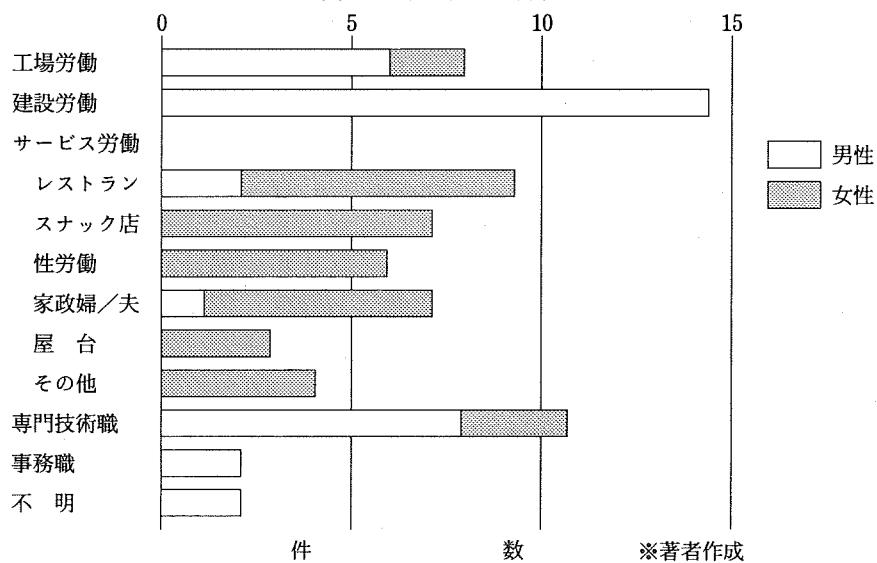


図-6 現在の年収

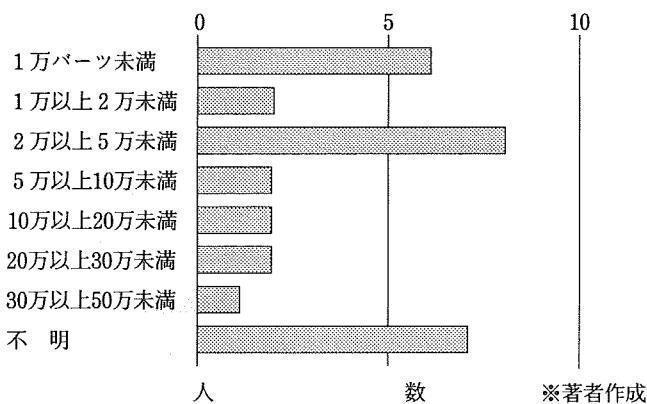
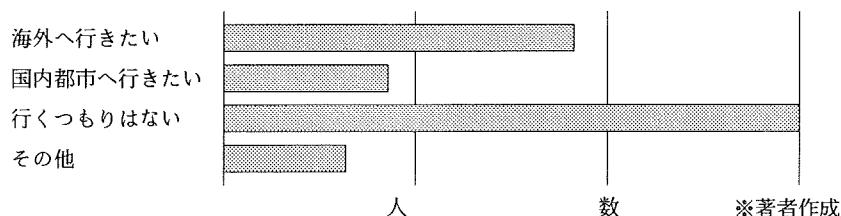


図-7 再移動の意志



変容する移動労働経験

②移動までの過程、③移動先での労働と生活、④帰郷後の労働と生活、⑤現在の状況と今後の意向、以上の5項目を設定した⁶⁾。以下で使用される全てのデータは、2000年時点のものである。

(2) インフォーマント31名の概要

本節では、インフォーマント31名の属性等を概観しておこう。

まず、基本的な属性をみると、性別構成は男性13人、女性18人である。年齢構成は20代8人、30代12人、40代11人である。生家での両親の職業は、93%が自作農・小作農であり、その副業も村内での雑業が主であり、村内で生計を立てていたことがわかる。移動者本人の最終学歴⁷⁾をみてみると、学歴なし2人、小学4年卒14人、小学6年卒（7年卒含む）10人、中卒以上6人であり、8割近く

が小学校教育を受けた者であった（図-1）。

次に、移動労働に関するデータをみよう。初めての移動労働を経験したときの年齢をみると、半数以上（58%）が10代で初回の移動を経験し、次いで20代が35%、30代以上で初めて移動する者は僅かであった（図-2）。一人当たりの移動回数は、1回6人、2回11人、3回12人、4回以上2人となっており、2回以上移動労働を繰り返す者が8割にのぼる（図-3）。移動先をみると⁸⁾、首都バンコク31件、その他の国内都市16件、日本13件、台湾3件、シンガポール2件、イラク2件、サウジアラビア2件、オーストラリア2件、韓国1件、マカオ1件である。国内移動が64%であるのにに対し、海外への移動は36%にのぼる。海外移動の内訳をみると、中東への移動が15%であるのにに対し、アジア太平洋地域への移動は85%にのぼり、その

図-8(a) インフォーマントの移動経歴 (a - i)

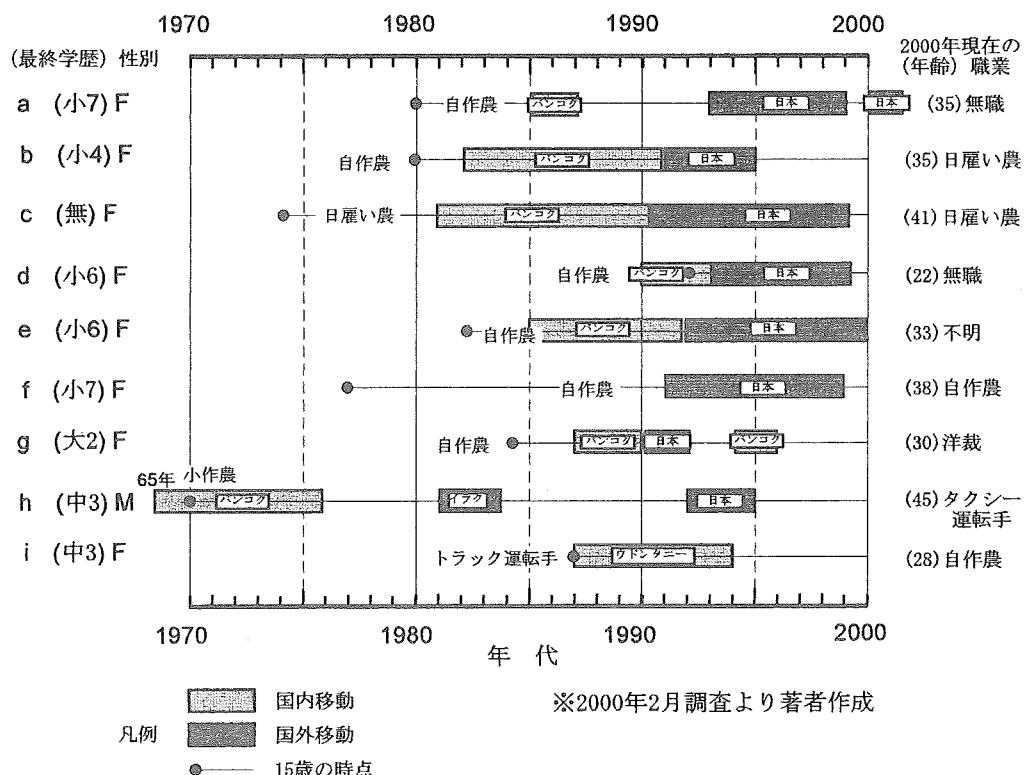
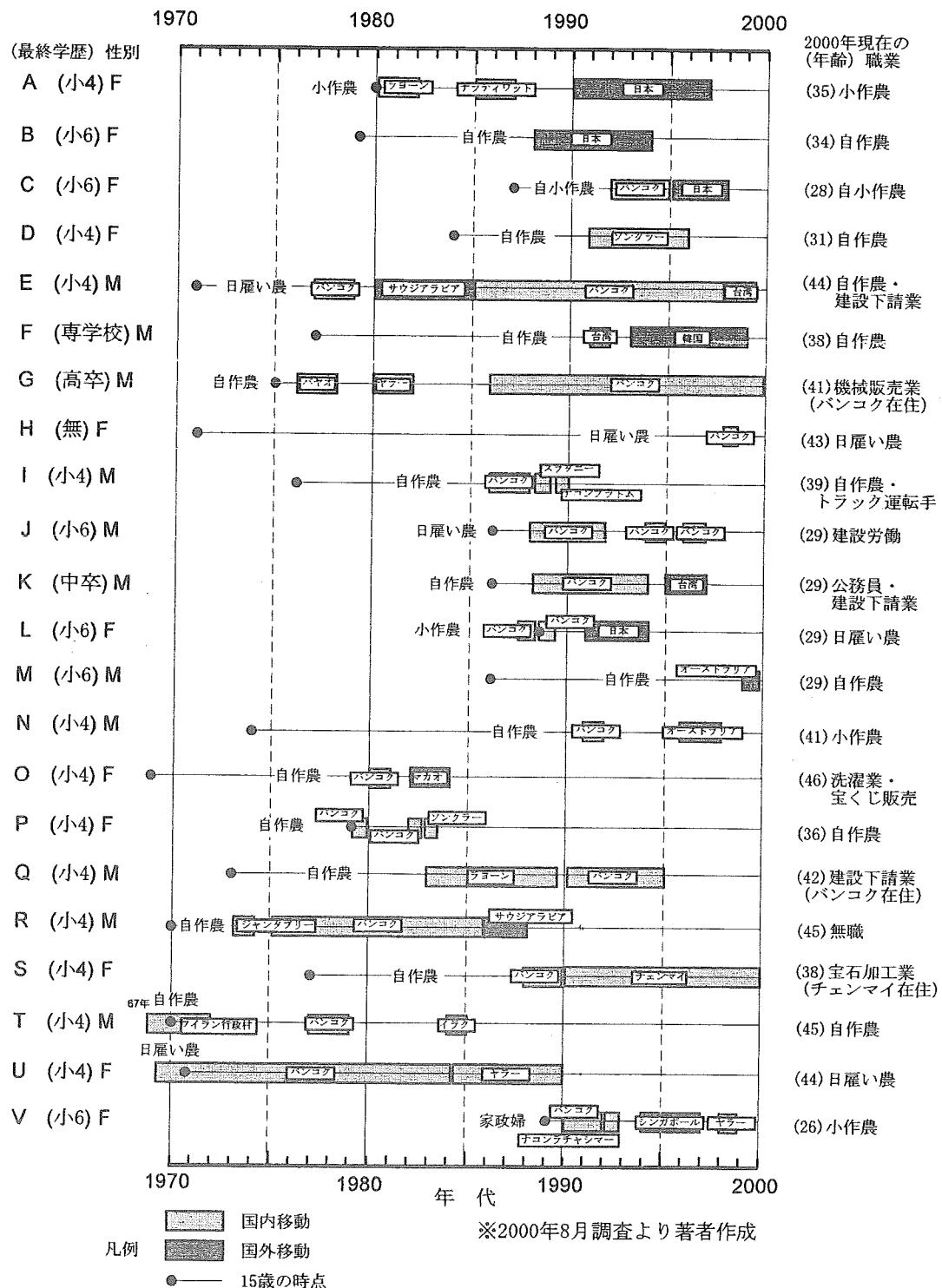


図-8(b) インフォーマントの移動労働経歴 (A - V)



半数近くが日本への移動である（図-4）。移動先での職業をみると、工場労働（8件）と建設労働（14件）が全体の30%、事務・専門技術職（13件）が18%、サービス労働（36件）が49%と半数近くを占めている。ここではまた、工場労働・建設労働・事務・専門技術職の大半が男性であるのに対し、サービス労働のほとんどを女性が占めている点が指摘できる（図-5）。

最後に、帰郷した彼らの現在の状況を見ておこう。帰郷後の現在の職業は、自作農8人、小作農3人、自小作農2人、日雇い農4人、兼業農2人、農業以外8人である。農業に専門に従事している者が42%、賃労働に主に従事している者は45%である⁹⁾。移動者を含む世帯の年収をみると、1万バーツ未満6人、1～2万未満2人、2～5万未満8人、5～10万未満2人、10～20万未満2人、20～30万未満3人、30～50万未満1人、不明7人であり、年収5万バーツ未満の世帯が半数以上を占めている（図-6）¹⁰⁾。再び村を出て移動労働をする意志があるかどうかについては、「海外へ行きたい」9人、「国内都市へ行きたい」4人、「行くつもりはない」15人となり、再移動の意志ありと回答した者と、村内に留まると回答した者が半々であった（図-7）。再移動の意志がある者のなかでは、国内より海外を希望する者が多く、また国内外ともに移動先を特定して回答する者が多数あった。

（3）変容する移動労働経験——「口減らし」・「出稼ぎ」からこぼれ落ちるもの

本節では、聞き取り調査から見出された、従来の「口減らし」や「出稼ぎ」とは異質と考えられる移動労働経験について、それぞれの特徴を比較しつつ浮き彫りにしていく。その際、1) 移動圏、2) 滞在期間、3) 送金、4) 移動契機、5) 移動の動機、6) 移動労働観という6つの観点から検討する。全インフォーマントの移動労働の経験は、

図8(a)(b)に示したので参照にされたい。

1) 移動圏の拡張

移動労働者31名の経験をみてみると、まず彼らのほとんどが2～5回にわたる移動を繰り返していることが指摘できる。そのうち国内移動のみの経験者は10人、海外移動経験者は21人である。

国内移動のみの経験者をみると、国内一都市へしか移動しない者（「国内1ヶ所」：i、D、H、J）4人のほかに、複数の都市を移動する者（「国内→国内」：G、I、P、Q、S、U）6人がみられる。また、村に帰郷はしても都市にはば移住している者（「国内都市移住」：G、S）2人がいた。

海外移動の経験者をみると、国内移動のあと海外へ移動している者（「国内→海外」：a、b、c、d、e、g、h、A、C、E、K、L、N、O、R、T、V）が17人、初回から海外へ移動している者（「初回から海外」：f、B、F、M）が4人がいる。また、同じ国へ2回以上訪問している者（「海外1ヶ国2回以上」：a、V）が2人、2ヶ国以上を訪問している者（「海外2ヶ国以上」：h、E、F）が3人がみられた。

このように、移動圏が国内一都市に留まり続けるパターンがある一方で、2回3回と移動を繰り返すうちに、国内都市を経由して海外へ移動する者や、2ヶ国以上を移動する者など、移動圏が拡大している状況がうかがえる。また、年代をくだるにつれ移動先が多様化し選択肢が増大している状況も指摘できる。国内移動しか見受けられない1970年代を過ぎると、80年代にはサウジアラビア、イラクなどの中東地域が現れ、90年代には日本をはじめ韓国、台湾、シンガポールなどのアジア地域が移動先に登場している。

2) 滞在期間の長期化

国内移動者や、幼年・若年時の初回の移動では、近隣都市や国内の大都市へ移動する者が多い。そ

表-1 送金の有無

	国 内 移 動	海 外 移 動
送金あり	[I] b-1, d-1, h-1, i-1, A-1, C-1, D-1, E-1, G-2, H-1, I-1, I-2, I-3, J-1, J-3, K-1, N-1, P-2, Q-1, Q-2, T-1, U-1, U-2, V-1, V-5,	[III] a-2, a-3, b-2, d-2, f-1, g-2, h-2, h-3, A-3, B-1, C-2, E-2, E-4, F-1, F-2, K-2, L-3, N-2, R-3, T-3, V-3, V-4
送金なし	[II] a-1, c-1, e-1, g-1, g-3, A-2, G-1, G-3, A-2, G-1, G-3, J-2, L-1, L-2, O-1, P-1, Q-3, R-1, R-2, S-1, S-2, S-3, T-2, V-2	[I] c-2, e-2, M-1, O-2

* アルファベットは図8(a)(b)のインフォーマント番号と対応している。後の数字は、何回目の移動であるかを示す。例えば、[I]にA-1、[II]にA-2、[III]にA-3がある場合、Aさんは初回の移動では国内都市へ移動し送金していたが、2度目の移動では送金がなくなり、3度目の移動で海外へ踏み出し、送金を再開したということである。

の滞在期間は、①農閑期だけの季節的な移動、②数ヶ月間国内都市で働いては数日帰郷するという短期的移動の通年的な繰り返し、③10～20代の数年間を親戚宅や知人宅で過ごすといったケースがみられる。もちろん、数年間世話をやった親戚宅から独立して母村に戻り通年的移動を開始する者や、季節的移動から通年的移動に移行する者、数年間の通年的移動を繰り返したあと農業に戻る者もあるので、一人の移動者が複数の移動パターンを累積していくことも多い点は指摘しておくべきであろう。

一方、海外移動者で特徴的なのは、数年間にわたり一度も帰郷することなく移動先で生活し、その後村に帰郷ししばらく滞在したあと、再び数年にわたる長期的な海外移動を繰り返す点である。特に、移動先が日本の場合、その滞在期間は5～10年という長期にわたることもある。中東諸国や台湾への移動労働の場合、事前に契約するケースが多く、その滞在期間は1～2年に及ぶ。重要なのは、第一に、こうした滞在期間の長期化が移動先での定住に一概には結びついていない点、第二に、それにもかかわらず村内にも定住することなく長期的な移動を繰り返している点である。彼らは、村に戻るか否かという判断において、選択可

能性がある人々と考えられる。従来の「帰村を前提とした出稼ぎ」、「離村を前提とした口減らし」という区分では捉えにくい現象が生じていると考えられる。

3) 送金の継続

次に送金についてみてみよう。送金の有無と移動先の違い（国内／海外）とによって31名による73回の移動労働を分類したのが、表-1である。国内移動は実質的に滞在期間が1年未満の短期移動の通年的な繰り返しが多く、海外移動は1年以上の長期滞在が多い。

従来では、[I]（国内・送金あり）は村に戻ることを前提とした出稼ぎ労働者、[II]（国内・送金なし）は村に戻る必要のない口減らしで将来的に都市移住者化する人々、[III]（海外・送金あり）は、[I]に属する人々が移動先を海外に転じただけの「海外からの出稼ぎ労働者」、[IV]（海外・送金なし）は、将来的に海外移住者化（定住化）する人々と考えられてきた¹¹⁾。

しかし、31名の移動経験をみてみると、一人の移動者の経験は、同一グループに固定的ではなく、移行していることがわかる。まず、[I]から[II]、[II]から[I]へ移行する人々がみられ

るが、これは、稼ぎが足りず送金できなくなったり（またはその逆）等の事情が考えられるだろう。

次に、〔I〕から〔III〕への移行が見られる。彼らは、変わらず村へ送金しているので、出稼ぎ場所を国内から海外へ変更しただけの人々と考えられる。最後に、〔II〕から〔III〕へ移行する人々がいる。彼らは、元々国内では送金せずに済ませていたにもかかわらず、海外移動を契機に送金を開始した人々である。彼らは元々〔I〕に属していた移動者とは異なり、村に戻ることを前提としているわけではないと考えられる。つまり、帰国するかどうかの選択可能性がある人々が、戻るかどうかわからないところに送金を続けているのである。

一見、非合理的にみえるこの送金は、移動者個人にとっては実は合理的である。出稼ぎ労働者（〔I〕及び〔I〕から〔III〕への移行者）が「帰郷するために」送金しているとすれば、〔II〕から〔III〕への移行者は「帰郷もできるため」の備えとして送金していると考えられるのではないだろうか¹²⁾。換言すれば、帰郷と移住両方の可能性を残すために送金していると考えられる。彼らの生き方を具体的にいえば、移動者本人は移動先で生活の足場を作りつつ、なおかつ「いつでも村に戻れるが、場合によっては戻らなくてもいい」という状態を維持するために、村の家族に送金を続けるという生き方である。このように一人の移動者が二つの生活の場を保持しようとする事態は、移動者個人の選択肢を広げているという点で合理的といえるのではないだろうか。

4) 移動契機の拡充

移動を決断したときのきっかけには、どのようなものがあるだろうか。まず挙げられるのは、①家族や親戚による呼び寄せ・雇用の依頼・紹介である。例えば、バンコクの親戚宅で家政婦として住み込みで働いたり、国内の諸都市で建設下請業

を営む親戚を頼りに点々とするといったケースである。

38歳女性Sにとっても、バンコクに住む姉夫婦は、移動労働のきっかけとなる重要な人物であった。結婚後、Sはランパーン県の夫の実家で自作農を営んでいたが、生計は厳しかった。夫は単身でのリビアへの渡航を考えたが、渡航費用を貯めることができず、途方にくれていたところに、バンコクに暮らす姉からの誘いがあった。

私の姉がバンコクの男性と結婚し、その男性はバンコクでタクシー運転手として働いていました。バンコクに住んでいるその姉が私に同情して、バンコクに来て仕事を探すように呼び寄せたのです。姉は私に小さな投資をしました。行商人として、干したイカを販売するのです。行商人というのは、台車で移動して販売するのです。（中略）姉が宿泊も支払ってくれましたし、台車の費用も支払ってくれました。（中略）（姉はS夫婦に）同情したのです。ランパーンで苦労しているようだから、バンコクへいらっしゃい、と。仕事も探してあげるし、干しイカや魚を行商人として販売することもできるよ、と。そこにいるよりきっといいお金になるし、そのための準備もしてあげるから、と言ったのです。〔38歳女性S〕

Sの姉はただ単にバンコクへ来るように勧めただけでなく、宿泊を用意し、行商人として働くための資金まで提供している。このように、家族や親戚による呼び寄せ・雇用の紹介・依頼は、親戚による居住や雇用等における支援を前提としているため、村から出て働いたことのない人々にとって、都市での労働にともなうリスクを負わずに済むという利点がある。さらに、移動者が若年者であっても両親は安心して送り出すことが出来るので、村に残る家族にとっても受け入れやすい。そのため移動を決心する非常に重要なきっかけとなっている。

次に重要な契機として挙げられるのは、②都市や海外からの帰郷者による情報やつてである。近隣に住む身近な先例の存在は、雇用口や渡航方法に関する具体的な情報源となっている。

(マカオへ行くことに決めた) 理由は、私の友人が一マカオ行きを勧めた店長の店の店員でしたが——、そこ(マカオの美容院)に行ったことがあって、いい場所だし、行けばよいお金になるし、店長は月給で支払ってくれるし、と言ったのです。宿泊は無料だし、食事だけ自分で用意すればいいだけだよ、と。(中略) 仕事に対して心配はありませんでした。マカオの店から帰国していた友人から話を聞いていましたから。彼女が全てを説明してくれました。ですから、仕事については全く心配はありませんでした。でも、行ったことのない見知らぬ場所へ行くことに対する心配していましたが。仕事に就けないというような心配はありませんでした。帰国していたその友人の代わりに自分が行くのだとわかっていましたから。 [46歳女性O]

身近な先例の存在は、こうした具体的な情報源であるばかりでなく、海外への移動労働という選択肢を村民にとって身近なものにし、海外移動労働の「流行」といわれるような状況さえ生み出している。こうした状況が、移動を決心する間接的な契機として作動していることは明らかであろう。

(当時、Bが日本へ行く以前に) 村の何人かは既に日本に行ったことがあります、聞いたことがあります。(中略) 出向いて話をしたり、議論をしたりといったようなことではありません。(噂ですか、という質問に対し) そう、それから目に見える状況ですね。日本へ行った人々が、お金を送金し、より良い生活を手に入れることができていました。だから、ブローカーが村に来た時は、私にとって大きなチャンスだったわけです。(中略) (ブローカーが来る以前から、

既に日本で働くということに) 関心があったのです。(中略) 日本へ行くことが村で流行していたのです。ですから、パンコクやチェンマイへ行くことは、当時考えませんでした。(パンコクへ働きに行ったことは) ありません。真っ直ぐ日本へ行ったのです。 [34歳女性B]

こうした契機のほかに増大しているのは、③斡旋業者。仲介業者による勧誘である。村にブローカーが直接勧誘に来るケースのほかに、村民が仲介業者となって斡旋しているケース、都市部の斡旋業者に自ら接触するケースが見受けられた。

31歳女性Dが初めて村を出るきっかけとなつたのは、国内で性労働者として働く若年女性をリクルートするブローカーが村にやってきたことであつた。

ブローカーがドークカムタイ(市)からこの村にやって来て、私も彼と知り合いになりました。私は村の友人を介して、そのブローカーと知り合ったのです。ブローカーの男は「仕事が欲しいか」と尋ね、私が「できれば欲しい」と答えると、「もし仕事が欲しいなら、ソンクラーのハジャイに連れて行ってあげる」と言いました。(中略)(滞在期間などは) 何も計画などしませんでした。ただ行っただけです。(中略)(他の移動先は考えたか、という質問に対し) いいえ。実際のところ、ブローカーが「そこに仕事がある」と言ったので、そこへ行くことに決めたのです。それだけです。(移動先についての詳細は) 知りませんでした。 [31歳女性D]

Dは移動先での仕事について、事前にそれほど詳しいことは聞いていないという。ブローカーを媒体にすることによって、自らの移動労働の経験も、移動先の知識もないままに、Dは村を出ることを決めたといえるだろう。

以上のように、移動の契機は、家族や親戚によ

る呼び寄せに留まらず、移動者相互のネットワークや、斡旋業者・仲介業者という組織によって拡充している様子がうかがえる。

1)～4)では、移動圏・滞在期間・送金・移動契機という4つの観点から、従来の「口減らし」や「出稼ぎ」では捉えきれない現象が生じていることを明らかにしてきた。若年期の口減らしや、農閑期の国内都市への短期出稼ぎが依然として存在する一方で、移動圏の拡大や滞在期間の長期化、村の長期不在者による送金の継続、移動契機の拡充¹⁰⁾というように、移動のパターンに変化が生じており、従来とは異なる移動労働のタイプが出現していることが示唆しうるのではないだろうか。

5) 移動の動機

5)～6)では、移動労働者の主観的な側面に踏み込み、事例を挙げつつその特徴を検討する。まず、移動労働者が移動を決意したときの動機はどのようなものであるのだろうか。

【事例1：35歳女性A】——「口減らし」と気楽さ

まず、35歳の女性Aのケースをみてみよう。Aは11歳で小学校を卒業してから、両親の営む農業を手伝っていたが、15歳のとき、ラヨーン県に住む叔母の元での同居と家内労働を前提に、初めて単身で村を出た。Aは、当時の家族の生活が経済的に大変苦しいものであったと回想する。そのときの動機をAは次のように語る。

(当時の家族の状況は)非常に貧しかったのです。両親を可哀想に思って出掛けたのです。ですから、月500バーツの収入を得た時は、全部を母親の元へ送りました。毎月です。(中略)姉2人と弟、妹は両親と家に留まり農業をしていました。当時、父親は少しでも収入を増やすため、農閑期には森林で販売用の木の伐採を行っていました。だからこそ、私は両親を可哀想に思ったのです。何もしないよりは、僅

かでも収入を得て独立しようと思ったのです。[35歳女性A]

Aにとって叔母の家で生活をすることは、自宅で「何もしないよりは」ましなものであった。それは、自らの送金によって家族の生活を支えなければならないという切実な動機というより、むしろ、自分が自宅に留まることによって家族にかかる経済的な負担を軽減できるというささやかな期待であった。「両親を可哀想に思って」移動したという彼女の語りには、ある種の気楽さら読み取ることができる。

さらにAは、兄弟のなかで自分が村を出ることになった理由について次のように述べている。

(5人兄弟のうちAが選ばれたのは)他の兄弟たちはまだ(働きに行く)準備が出来ていなかったからです。弟と妹は若すぎましたし、姉は最年長でしたから、家族のために、他の兄弟以上に働く必要がありました。私は3番目の子供でしたし、年齢もまぁ丁度良かったですし、姉のように家族にとって主要な人物ではありませんでした。だから、私は(働きに行く)「準備が出来ていた」のです。(中略)私が正に適任だったのです。

Aの姉は、両親の農業を手伝い、家族の面倒をみなければならぬ「主要な人物」であった。それに対し、Aは自分自身が家族のなかで「主要な人物」ではなく、むしろ居ても居なくても困らない余り者であったと想起している。こうした状況は、自宅に居場所のない感覚、居づらさを感じさせると同時に、一方で移動に対する身軽さも生み出した。

叔母宅へ行くことになった具体的なきっかけについて、Aは次のように述べる。

(叔母宅へ行くことになった)いきさつはこうです。

叔母が私の母親に会いにこの村へ来たのです。叔母と母親との話の中で、勉強も仕事もしていない15歳の娘がいるのなら、娘をラヨーン県に来させないか、ということになったのです。当時、叔母は月500バーツ支払うといい、ただ子供の面倒をみて家事をするだけでいいから、と言いました。話は母親を通して聞きましたが、実際には、両親に行くように勧められたり、頼まれたわけではありません。自分で独立して生活しようと考えたのです。[35歳女性A]

両親のもとにやって来た叔母の誘いによって、Aは移動を決意した。ここでは移動労働の契機が、Aにとって非常に消極的で受動的なものであったことが指摘できる。以上のように、動機に踏み込んで検討してみると、Aの事例はいわゆる「口減らし」の意識であることができるだろう。

【事例2：41歳男性N】——「出稼ぎ」と受動性
次に挙げるのは、41歳の男性Nのケースである。Nは村内で日雇い農や建設労働をしながら暮していた。Nが32歳のとき、6歳になった子を同居していた妻の両親に預け、妻と2人でバンコクへ働きに行くことを決めた。当時の動機について、Nは次のように述べる。

理由は、家に仕事がなかったからです。お金を得るためにです。(中略) 農地を買うなどのためではありません。家族の日々の出費のためです。(中略) 海外へ行くことも考えましたが、そう簡単には行けませんでしたので、かないませんでした。もうひとつは、当時、多くの村民が海外へ行って稼いでしていました。だから自分も村をでることを考えたのです。[41歳男性N]

農地もなく、村内の雑業で生計を立ててきたN夫婦には、自分たちがなんとかして、妻の両親と自分の子どもを含む家族の毎日の生活を支える

主要な収入を得なければならないという意識が強くみられる。そうであれば、「家（村内）に仕事がない」以上、バンコクであれ海外であれ、どこかに働きに出なければならないことは、いわば選択のしようのなかったこととしてNには捉えられている。ここには、「口減らし」の気楽さも、都市に対する憧れや期待もない。あるのは、家族の生計に対する強い責任感と、ある種の悲壮な決意である。すなわち、ある期間だけは、どんな苦労にも耐えて稼がなければならないという「出稼ぎ」労働者の切実な意識である。

バンコク行きのきっかけについては、Nは次のように述べている。

(バンコクでの雇用を知ったのは) 村の友人からです。友人がバンコクに仕事口があると教えてくれたのです。(中略) 一つのルートみたいなものです。バンコクで仕事をしている友人のつてで。もし興味を持って、バンコクへやってくれば、仕事場をみせでもらえますし。ですから、私はバンコクにいるその友人と連絡をとりました。その友人の夫がバンコクの会社で働いていて、私はその会社に紹介してもらったのです。(バンコクでの仕事が得られることを確信していたのか、という質問に対して) そうです。[41歳男性N]

移動の契機となったのは、先にバンコクで働いていた帰郷者からの情報であった。彼はそうした「ひとつのルート」、すなわちバンコクで働く同郷者のネットワークを利用して、電線修理工としての雇用口を得たのである。こうした移動者相互のネットワークを積極的に利用している点では、「口減らし」に比べ、より能動的に移動のきっかけを捉えているといえるだろう。だが、それを支えているのは、貧困など何らかの理由のために「選択の余地なく移動せざるを得ない」という、極めて受動的な「出稼ぎ」意識である。

【事例3：45歳男性T】——能動性・選択性

最後に、45歳男性Tのケースをみてみよう。Tは22歳のとき、既にバンコクに2年間にわたって短期的な移動を繰り返し経験している。その後、村で結婚して子供が生まれ、29歳のとき、今度は海外へ働きに行くことを考え始める。その動機について、Tは次のように述べている。

（イラクへ行った）理由は、お金を作りたかったからです。自分の家族のために。（何か目的があったのか、という質問に対し）家族としての準備が完全でなかったからです。新しい家を建てたかったし、家族にもっとよい生活をさせたかったです。お金を稼ぐためです。[45歳男性T]

移動の動機が「お金を稼ぐため」であるという回答は、ほとんどの移動労働経験者から聞かれるものであり、その点ではTも例外ではない。しかし、「家族にもっとよい生活をさせたかった」というTの動機は、経済的な上昇志向が強く感じられる点で、「出稼ぎ」の悲壮感とも、「口減らし」の気楽さとも異なると思われる。

さらに、Tはイラクへの単身の渡航を決意するに際、渡航先として、他の選択肢もあったということを次のように回想している。

一度、サウジアラビアへ行こうと試みたことがありました。でもサウジアラビアへの労働契約はたった1年間だったので、諦めたのです。それは義父のもとにいた頃の話なのですが、サウジアラビアへ行こうとしたことがあったのです。2度目の今回は、友人と一緒に行き先（移動先）を探しにバンコクへ行ったのです。[45歳男性T]

Tは、サウジアラビアという選択肢を、契約期間が1年間と短いため稼ぎが不十分と考えて「諦

め」、今度は自分で「行き先を探しに」バンコクの斡旋業者の元へ出向き、イラク行きを決めたという。こうしたTの動機の語りには、移動先について、複数の選択肢があるなかから自らが選び取ったのだという意識が垣間見られる。さらにそれは移動先の選択のみならず、斡旋業者の選択、さらに移動するか否かという選択さえも、そこに自らの主体性を挟み込みうる「選択性があった」という文脈に貫かれているのである。村を訪れた斡旋業者からの勧誘を受け入れるのではなく、自らが複数の斡旋業者と接触し、積極的に業者と移動先を選択したのだという報告は、その他の事例からも見受けられる。29歳のとき台湾へ渡航した、38歳男性Fの報告を挙げておこう。

（台湾については）他の郡の仲介者から聞きました。××郡（隣の郡）に住んでいる人です。彼が台湾での仕事を紹介してくれたのです。（中略）私はウドンタニ県のブローカーと接触していました。バンコクのブローカーとも連絡を取っていました。マレーシアや、名前は忘れましたがアラブのどこかの国へ行こうとも思いました。しかし、ブローカー会社にまた騙されることを恐れて、このブローカーを選んだのです。タイ人をたくさん外国へ送りこんでいる強い会社を、と考えて。そのためには75,000バーツを支払わねばなりませんでしたが。[38歳男性F]

Tの経験に戻ろう。Tが訪問した斡旋業者は、トラクターの運転手をリクルートしていた。Tは、「義父が大きなトラクターを持っていたので」、「家にいる間に、トラクターの運転には慣れてい」た。そこでTは、斡旋業者の行う運転技術のテストを受け、11名のうちTがただ一人合格したとい。だが問題はこれだけではなかった。

私は家に戻って、色々なことをクリアしなければなりませんでした。運転免許証の書類をタイ語から

英語、アラビア語にしたり、土地所有の証明書を銀行に預けなければならなかったり、ブローカーがそのことを銀行に確認したり、ほとんど全てを自分でクリアしました。パスポートや渡航費なども、ほとんど全てを。[45歳男性 T]

Tは運転技術のテストや必要書類の準備、渡航費の用意など、いくつもの困難な状況がありながら、それらを「全てを自分でクリアしました」と語る。すなわちTは、こうした周囲の状況を、積極的な自分の力で克服したもの（或いは克服し得るもの）として捉えているのである。このように、「自分が移動をめぐる事態を主体的に支配し、制御している」という認識は、先述した「選択性があった」という文脈につながっていると考えられる。

こうした積極的で能動的な移動の動機の語り方——移動労働者自身が移動労働をより能動的に選択していると感じていること——は、先述の二つの事例にみた気楽な「口減らし」の意識とも、悲壮な「出稼ぎ」の意識とも異なる様相を呈しているのである。

6) 移動労働観——都市での生活と村での生活

最後に検討したいのは、移動労働者自身がどのように自らの移動労働経験を捉えているのかという点である。動機の検討に引き続き、主観的な側面からその特徴を捉える試みである。かつての都市での労働と生活を、移動者本人が現在どのように捉えているかは、彼らのライフヒストリーの中で「帰郷の理由」、「都市での生活の感想」、「再移動の意志」などを述べている箇所から把握できる。よって以下ではこれらの観点から検討していく。

村と都市を切り離す——「口減らし」

44歳の男性Eは、21歳から1年間、バンコクで建設労働者として働いた人物である。Eは、バン

コクでの労働を止め、村に帰郷しようとした理由を次のように述べている。

（バンコクで働いている間に）数回帰郷しました。バンコクに戻りたいと思えば戻ましたが、戻りたくないと思えば、ただ家に留まることもできたのです。最後に帰郷した時、村のある女性と知り合い、結婚しました。ですから、もう戻りたくないと思ったのです。[44歳男性 E]

Eはその1年間、バンコクと村との間の往復を繰り返していたが、その間中、Eは移動労働に「戻りたくないと思えば、ただ家に留まることもできた」と言うのである。すなわちEにおいて移動労働は、切迫した必要性に余儀なくされたものとしては捉えられておらず、むしろ、村でも都市でもどちらに行ってもよいというように、どちらも肯定も否定もしない。

31歳女性Dも、Eに似た報告をしている。Dは22歳から5年間、ソンクラー県で性労働者として働いていた。その間、1年に1度以上は帰郷していたという。当時の都市での労働について、Dは次のように述べている。

（ソンクラー県での）仕事はいつでも辞めることができました。もし働きにくくなったら、ただ行くのを辞めれば良いことでした。（中略）いつでも辞めることができます。（中略）（往復を繰り返していた当時は）ハジャイに住んでいる時は家を忘れ、家に居る時はハジャイを忘れる、といった感じでした。[31歳女性 D]

Dは、都市での生活と村での生活について、どちらも肯定も否定もせず、両者を非連続のものとして切り離して捉えていることがうかがえる。「口減らし」から「都市移住者」化する人々にとって、その過程において、村に住む自分と都市に住

む自分の切り離しの発想をもっているとしても不思議なことではないだろう。

「過酷な都市生活」と「本来の村での生活」——「出稼ぎ」

41歳の男性Nは、32歳から1年間、バンコクで電線修理工として働いた。Nは帰郷の理由を次のように述べる。

(帰郷理由は)仕事が嫌になったからです。仕事では、会社のトラックで場所から場所へ移動しなければならなくて、その移動に疲れたからです。(中略)
会社は大抵、仕事の場所から場所へ労働者を移動させるためのトラックをもっていて、移動させるのです。仕事の場所はいつも変わるので。ここが終われば次へ、同じ場所ではないのです。ですから、命じられればいつも朝出かけ、夜戻ってこなければなりません。こういった移動が嫌になったのです。その上、日給120バーツというのは、決して昇給しませんでした。[41歳男性N]

都市での労働に疲れ、「嫌になったから」というNの報告は、「いかにバンコクでの労働が重労働であったか」という訴えに満ちている。このように、都市での生活を「悲惨で過酷な体験」として捉える認識は、だからこそ一定期間だけは「過酷な都市生活」を耐え忍んで稼げるだけ稼ごうとする「出稼ぎ」労働者のものであろう。

39歳の男性Iは、親戚の建設下請業者のもと、日雇い建設労働者として、25歳から4年間にわたり国内都市への短期的移動を繰り返した。Iは、帰郷の理由と移動労働経験について次のように述べている。

(都市へ行かなくなった理由は)もう行きたくないと思ったからです。村にいる方を好んだのです。(都市での労働と生活の感想は、という質問に対し)そ

の3ヶ所(での仕事)は、自分の仕事ではありませんでした。仕事はあまり好きではありませんでした。しなければならない仕事だっただけです。私自身としては、運転手になりたかったのです。運転手が好きな仕事だったのです。[39歳男性I]

Iにとって、3都市での建設労働は「しなければならない仕事だっただけ」であり、本来の「自分の仕事」とは、バンコクへ行く以前からしていた農業とトラック運転手の仕事を意味する。ここからうかがえるのは、村での労働と生活がIにとっての「真の生」であり、都市での労働と生活は「仮の生」に過ぎないという認識である¹⁴⁾。こうした移動労働観は、本来ならば村内に定住し続けたいが、貧困などのために移動を余儀なくされ、村の家族のために都市での過酷な重労働に耐えるという意識をもつ「出稼ぎ」労働者のものであろう。

「チャンス」としての移動労働と選択性という「豊かさ」

ところが、このように移動先での労働と生活をネガティブに捉える人々とは対照的に、移動経験をポジティブに捉えている人々がライフヒストリーの聞き取りから見受けられるのである。

34歳の女性Bは、24歳から5年半、日本でレストランと寿司工場で働いていた。Bは帰国の理由を次のように述べている。

(帰国を決意した理由は)「十分な」お金を稼いだとはいえないが、幾らかは家に送金しましたし、母親はそのお金でより多くのものを手に入れましたし、自分の貯金もある程度貯まっていました。つまり、以前よりは(生活が)ずっと良くなったということです。それに、一番の理由は家が恋しかったからです。仕事がきつかったことは、大した理由ではありません。自分にとって、工場での仕事はきつい

仕事では全くありませんでした。(中略)「もうこの辺でいいや」ということです。家が恋しかったから。
[34歳女性B]

続いて、44歳の男性Eも、24歳から5年間サウジアラビアで働き、帰国した理由を次のように述べる。

(帰国の)主な理由は2つあります。一つには、会社が労働者を減らし始めたからです。仕事が減っていましたから。でも、私に関しては、会社はもっと居て欲しいと望んでいました。ですが、自分としては「もう十分長く働いた」と思ったのです。(中略)それから、両親も年を取りましたし、病気になったからです。私が帰国して2ヶ月で両親は亡くなってしましました。[44歳男性E]

両者に共通するのは、「もうこの辺でいい」、「自分としては『もう十分長く働いた』と思った」という感想である。すなわち彼らは、移動労働をまだ続けることもできたけれども自らの判断で帰国を選択したのだと捉えており、外国での労働の過酷さのあまり帰国したとは語らない。Bにいたっては、「仕事がきつかったことは、大した理由ではない」と述べており、家族が恋しかったことのほうが重要であったと回想している¹⁵⁾。

さらにBは、再移動の意志について、次のように述べている。

また家を離れて働きに行くには、歳をとりすぎましたよ。日本やその他の都市へはね。(中略)もう一度始めるには歳をとりすぎましたよ。でも、また日本へ行ってみたいとも思っています。(具体的な予定はないが)もし日本へ行くチャンスがあれば、行きたいです。工場での生活が恋しく、懐かしいからです。(中略)日本での生活を懐かしく思うのは、こちらでは何もすることがないからです。農業以外には、

何もすることができないです。それに、月1万5,000バーツは日本では大した金額ではありませんが、タイの家に送ればまとまったお金になります。[34歳女性B]

Bは、村での生活は農業以外「何もすることがなく」、日本で経験した工場労働や工場の「おばちゃん」たちを懐かしく思い出すという。ここでは、村での生活を否定こそしないものの、日本の生活を非常に肯定的に捉えていることが指摘できる。また、日本へ行くことを「チャンス」として捉え、日本での移動労働が人生における一つの選択肢として存在すること、そしてそのこと自体をひとつの「豊かさ」として認識していることがうかがえる。

同様に、バンコク、台湾への移動労働を経験した29歳の男性Kは、再移動の意志について次のように述べている。

(再び移動労働をするつもりはあるか、という質問に対し)機会によります。機会があれば、多分行くと思います。(機会というのは、誰かが勧めに来て連れて行ってくれるとか)そういうことです。(中略)(農業をするつもりはあるか、という質問に対し)家を立て替えたいです。農業をしたいとも思っています。[29歳男性K]

B・Kとともに、村で農業を営む生活という選択肢を残しながら、同時に海外移動労働という選択肢も残そうとしている。また重要なのは、この語りに含まれるポジティブさである。彼らは、村から「出て行かなければならない人」や、村に「帰郷するしかない人」、「定住するしかない人」より、自分たちが「豊か」であると感じているのである。すなわち、選択性が増大すること自体を肯定的に捉えているのである。これに対して従来では、選択肢があることを、「都市にも農村にも定着でき

ない不幸なこと」として捉え、いわゆる悲惨な「出稼ぎ労働者」像が想定されてきた。こうした想定が、一部の移動労働者のリアリティとズレを生じていることは指摘できるのではないだろうか。

4)～5)では、移動労働者自身が自らの移動経験をどのように捉え意味づけているか、その主観的側面を検討してきた。その結果、「自らの能動的な選択」として移動を決心し、移動労働を個人の選択可能性を増大させるものとして肯定的に捉える移動労働者たちの姿が浮かび上がってきた。彼らは、自らの経験を自分の主体性や選択性と結びつけて理解し、「自分は帰郷も移動もできる」という認識のなかで、それ自体をある種の豊かさとみなしているのである。こうした認識は、一定の「気楽さ」をもって移動し、村の生活と都市の生活とを切り離して理解する「口減らし」の意識とも、また一方で「悲壮な決意」をもって移動し、都市の生活の悲惨さを強調し村の生活だけを肯定する「出稼ぎ」の意識とも異なる、新たなタイプの人々の登場を示唆しているのではないだろうか。

3. おわりに

本稿では、従来の「口減らし」や「出稼ぎ」という類型からはこぼれ落ちてしまう移動労働者の姿をいくつかの観点から描き出そうと試みてきた。彼らは、家族や親戚のみならず、移動者相互のネットワークや、幹旋業者・仲介業者といった多様な契機により移動を開始する。そして移動経験を繰り返す中で移動圏を国内都市から海外へと拡大し、1年～10年といった非常に長い期間にわたって帰国しない。しかし移動先に定住することもなく帰郷を繰り返し、村への送金を続けている。こうした点から、彼らが移動先と村という二つの生活の場を保持しようとしていると考えられるのではないか。しかも、彼らは自らの移動経験を悲惨なものとして意味づけてはおらず、自分の選択

性や能動性と繋げて理解し、移動労働を個人の選択可能性を拡大する「チャンス」として語る。すなわち、二つの場を保持し、そこに選択性があること自体をある種の豊かさとして肯定的に捉えているのである。「出稼ぎ」労働者が自らの経験について「移動せざるをえなかった」（選択性がなかった）ことを繰り返し語るのに対し、移動経験を「自らが選び取った選択肢の一つ」としてポジティブに語り、「帰郷も移動もできる」自分を前者より「豊かな」ものとして感じている人々が登場しつつあることが示唆できるのではないだろうか。

しかしながら、移動労働者の主観的現実に注目した本稿の限界として、(1)タイのマクロな人口移動状況や労働市場におけるインフォーマントの位置づけが十分になされていない点、(2)職種や婚姻、学歴などの客観的データの調査と分析の不足、(3)移動先の労働現場の未調査などが挙げられ、これらの点については今後の課題としなければならない。移動労働者をめぐる客観的構造について十分に踏まえた上で、彼らの主観的現実の語りの解釈をさらに深め、両者を繋げるかたちで論じることが必要であるだろう。

[注]

- 1) 口減らしの場合、厳密には親兄弟の死去などの理由で帰村することも考えられるため、一概に帰村しないとはいえない点は留意しておく必要がある。
- 2) タイ農村の移動労働者研究としては、北原淳や田坂敏雄による1980年代の調査研究がある〔北原編 1987〕〔北原 1990〕〔田坂 1991〕。また1990年代後半では、松薗（橋本）祐子が中部農村における調査を行っており、例えば従来の枠組みでは「移住者」と想定される村の長期不在者による送金や帰郷が増加していることを指摘していると思われる〔松薗 2000: 244-245〕。
- 3) A.S.Renardは、「移動 Mobility」という概念の基準が時間的空間的な範囲によって決められており、

移動者自身や村民による内部の定義や意味づけを無視してきたことを問題とし、そのために移動という行為を「移動者／定住者」という二分法でしか捉えられずにきたと指摘している [Renard 1981]。また、中村牧子は、近代日本社会と人の移動の研究において、移動とは、観察者の視点から捉える「事実的な移動」という側面に加え、「移動が起こっている社会のなかに同時代的に存在する、社会の成員自身が経験する出来事としての移動という側面を、不可避的にもっている」とし、後者を「了解」という概念で説明している [中村 1999:34]。

- 4) 当該地の移動労働者に関する先行研究。ルボルタージュは次のとおりである。パヤオ県を含む北部出身の性労働者の増加と農村の変容については [Ekachai 1990]、バンコクで働くドーカムタイ出身の性労働者については [Pongpaichit 1982]、ドーカムタイ群の移動労働者と地域への影響については [Padermchai 1995]、日本で性産業に従事したパヤオ県出身の女性移動労働者の聞き取り調査を行った [Caoutte・Saito 1999] など。
- 5) 聞き取りは日本語で直接話すケースと、英タイの通訳を介して行うケースがあり、一人1~2時間要した。聞き取り調査の内容はMDに録音し、後日これを書き起こした。本文での引用文は、注記のない限り、全てのこの書き起こしたものからの引用である [松井 2000]。
- 6) 更に詳細な項目は次のとおりである。①生い立ち(出生年／出生地／家族構成／生家の家業・副業／最終学歴)、②移動までの過程(動機／具体的契機／家族の反応と状況)、③移動先での労働と生活(移動時の年齢／形態／滞在年数／移動先／移動先での職業／居住環境／同郷者との関係／送金)、④帰郷後の労働と生活(送金の用途／帰郷後の職業)、⑤現在の状況と今後の意向(家族構成／職業／世帯の年収／再移動の意志)。
- 7) タイの学校制度は1978年に改正されているため、インフォーマントの学歴もその前後で異なる。1952年から1977年までの旧学校制度では、7歳からの下級小学校1~4年(義務教育)、上級小学校5~7年、下級中学校1~3年、上級中学校4~5年、高等教育(技術・職業学校、大学等3~4年間)であった。1978年以降の新学校制度では、小学校1~6年(義務教育)、中学校1~3年、高等学校4~6年、高等

教育(4年間)となり、義務教育は長期化された [丸山編 1996:174-175]。

- 8) 全インフォーマントの総移動件数は73件であり、以下で示される件数表記はその内訳である。
- 9) 実際には、帰郷後、家族の中心となって農業に取り組む者と、親兄弟が中心に営む農作業を手伝うだけという者もいるので、一概に帰農・離農傾向を論じることは難しい。
- 10) 2000年8月(調査時)現在で、1バーツ=2.58円。
- 11) 例えば、梶田孝道は、タイから日本へやってくる女性移動労働者は、個人主義的な欲求からの選択というより、家族の生活のための犠牲という側面が強いと指摘し、最終的には帰郷して結婚することを前提とした、家計補助的な出稼ぎ労働であると捉えている [梶田 1994]。1980年代から盛んになった日本における「外国人労働者」研究でも、途上国から流入する「外国人労働者」を、途上国農村での生活を前提とし還流していく「海外出稼ぎ労働者」か、長期的には日本に定住する非還流型の「外国人移住者」かという二者択一の議論が中心であった [花見・桑原 1989] [駒井 1993] [宮島・梶田 1996]。
- 12) この点について、送金のヨリ具体的なねらいについて、金額や使途等を含めた更なる調査によって明らかにすることは今後の課題である。
- 13) ここでいう移動契機の拡充とは、移動者ネットワークが血縁のみならず、地縁や組織的仲介者などにより重層的に形成されていること、またそれによって移動者が複数の移動先を想定できる状況が生まれていることを示唆しているが、移動者の間で交わされる情報や提供されるルートなど、より具体的な調査と分析が必要である。
- 14) こうした出稼ぎ労働者の都市／母村に対する認識については、松田素二がナイロビの出稼ぎ労働者を事例に行っており示唆に富む [松田 1996] [松田 1999]。
- 15) これは、実態としてBの日本での労働が重労働でなかったと指摘しているわけではない。実際、Bが働いていた「レストラン」とは、半強制的な性労働であった可能性が高く、その労働が過酷を極めたであろうことは容易に想像される。だが、そうした実態にもかかわらず、Bの移動労働に対する認識がポジティブである点を指摘したい。

参考文献

- 赤木攻・北原淳・竹内隆夫編 2000.『続・タイ農村の構造と変動－15年の軌跡－』勁草書房。
- Caouette, Therese and Saito, Yuriko, 1999. *To Japan and Back: Thai Women Recount their Experiences*, International Organization for Migration.
- Castles, Stephen and Miller, Mark J., 1993. *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, The Macmillan Press Ltd. (=1996. 関根政美・関根薰訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会。)
- Ekachai, Sanitsuda, 1990. *Behind the Smile: Voices of Thailand*. The Post Publishing Co., Ltd. (=1994. 松井やより監訳『語り始めたタイの人々：微笑のかけで』明石書店。)
- 花見 忠・桑原靖夫編 1989.『明日の隣人 外高人労働者』東洋経済新報社。
- 伊藤るり 1997.「日本の外国人労働者とアジア：グローバル・マイグレーションに直面する日本社会」小倉充夫編『荷国際移動論：移民移動の国際社会学』三嶺書房。
- 梶田孝道 1994.『外国人労働者と日本』日本放送出版協会。
- 北原 淳 1990.『タイ農村社会論』勁草書房。
- 北原 淳編 1987.『タイ農村の構造と変動』勁草書房。
- 小井土彰宏 1997.「国際移民システムの形成と送り出し社会への影響：越境的なネットワークとメキシコ地域発展」小倉充夫編『国際移動論：移民移動の国際社会学』三嶺書房。
- 駒井 洋 1993.『外国人労働者定住への道』明石書店。
- 駒井 洋 1999.『日本の外国人移民』明石書店。
- 丸山孝一編 1996.『現代タイ農民生活誌：タイ文化を支える人々の暮らし』九州大学出版会。
- 松田素二 1996.『都市を飼い慣らす：アフリカの都市人類学』河出書房新社。
- 松田素二 1999.『抵抗する都市：ナイロビ移民の世界から』岩波書店。
- 松井智子 2000.『移動志向の誕生：タイ北部農村パヤオ県ドッカムタイの移動労働者の生活史から』慶應義塾大学 大学院政策・メディア研究科提出修士論文。
- 松蔭（橋本）祐子 2000.「第2章 就業構造の変化」赤木攻ほか編2000所収。
- 宮島 喬・梶田孝道編 1996.『外国人労働者から市民へ：地域社会の視点と課題から』有斐閣。
- 森 幸一 2000.『還流型移住としての《デカセギ》』森廣正編『国際労働力移動のグローバル化：外国人定住と政策課題』法政大学出版局。
- 中村牧子 1999.『人の移動と近代化：「日本社会」を読み換える』有信堂。
- Padermchai, Pocharawan, 1995. *Labour Out-Migration and its Socio-Economic Impact on the Community in Dok Kham Tai District, Phayao Province*, Graduate School of Chiangmai University.
- Pongpaichit, Pasuk, 1982. *From Peasant Girls to Bangkok Masseuses*, International Labour Organization. (=田中紀子訳 1990.『マッサージ・ガール：タイの経済開発と社会変化』同文館。)
- Renard, Anchalee Singhaneatra, 1981. "Mobility in North Thailand: A view from within", G.W. Jones and H.V. Richter ed., *Population Mobility and Development: Southeast Asia and the Pacific*, The Australian National University.
- 田坂敏雄 1991.『タイ農民層分解の研究』御茶の水書房。